

### 青木健作の小説(上) : 「若き教師の悩み」

大越, 嘉七 / OOKOSHI, Kashichi / オオコシ, カシチ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1997-07-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019948>

# 青木健作の小説（上）

——「若き教師の悩み」——

大越 嘉七

青木健作の小説は余り読まれていない。極めて少数の研究  
者・関係者は別として、今では一般には全くと言ってよい程読  
まれていないのではないか。文学事典類には載っているが、い  
まや忘れられた作家の一人である。健作の小説を読み返して  
みて、改めてこれは全く残念な且不当なことではないかと思う。

明治末から大正期、作者二十代から四十代初めの十七、八年  
間に中・短篇合わせて凡そ四十篇の小説を発表したが、一九二  
八年（昭和三年）『青木健作短篇集』（春陽堂）を出してからは、  
一九六四年（昭和三九年）八十一歳で亡くなるまで（大学教授  
で俳諧研究家、俳人、歌人、随筆家として生涯を送ったが）小  
説は全く書かなかった。

作者は『短篇集』の「跋——著者小肖——いろいろのことの  
覚え——」の中で「この集は或る意味では自分の過去を葬る小  
さい墓標である。間もなく雑草離々たる中に埋れて、行人の目  
にさへ触れがたくなる運命を有する、真に小さい墓標であら  
う。」と書きつけている。健作の小説は正にその通りの不運な歴

史を辿って来ているかに見える。現在、健作の小説を読もうと  
しても手に入り難い。特に今取り上げようとする「若き教師の  
悩み」は入手し難い条件にある。私の知るところ、これまで健  
作の小説は『日本プロレタリア文学大系・序巻』（一九五五年、  
三一書房）に「影なき人」、『現代日本文学全集84・明治小説集』  
（一九五七年、筑摩書房）に「虻」、『明治文学全集75・明治反自  
然派文学集（二）』（一九六八年、筑摩書房）に「虻」と「夜の  
人々」、の僅か三篇が収録されているに留まる。「若き教師の悩  
み」（中篇・健作の最も長い小説）以外の代表的な短篇が殆ど収  
録されている前掲の『短篇集』が、一九八三年、郷里山口県新  
南陽市に「青木健作著作集復刻の会」が生まれて春陽堂書店か  
ら復刻版が出たが、部数の関係もあり一般には入手し難くなっ  
ている。『短篇集』以前に出た二冊の小説集・『現代文芸叢書22・  
お絹』（一九一三年、春陽堂。表題作の他に「虻」収録）と、『若  
き教師の悩み』（一九一九年、天佑社。表題作の他に「彼と少年  
——「行ける所まで」改題——、「残骸」——「梅雨の後」改題

——の二篇収録。「震災で紙型が焼失した為、絶版。」——跋）は版が重ねられること無く、今では稀覯本の部類に属すると言つてよい。現今巷では各種の文庫が競つて刊行され、一種のブームの観さえあるが、残念ながら健作の小説は一冊も出されていない。機会あるごとに、代表的な短篇を文庫の一冊として出してはどうか、と出版社に提言もしたが実現はしていない。

当然健作の小説についての論考、研究書も極めて少ないと言つていい。単行本としては僅か二冊に留まるのではないか。十数年前に青木秋雄・恵美子著『新南陽市の生んだ作家——青木健作の人と作品』（一九八一年、私家版）が書かれ、最近、と言つても一九九二年ようやく桑原伸一著『青木健作——初期作品の世界』（笠間書院）が出されただけである。いずれも同郷の人によるもので、前者は綿密な調査、四、五十名に及ぶ聞き取りを行ない、人と作品について網羅された資料的価値の高い労作で、付載されている詳細な年譜は貴重である。後者は初期の短篇一つひとつについて丁寧な分析・評価を加えて紹介した好著である。資料的価値のある写真の掲載、書簡による「その青春像」の叙述は貴重である。続篇が予定されており、期待されるところである。

夏目漱石に推讃された<sup>(注2)</sup>独自の作品世界、純粹で誠実な人間性に裏打ちされた倫理的・個性的な作風は、明治・大正という變動激しく目まぐるしい時代を厳しく刻印し、八十年余を経た今でもなお色褪せてはいない作品群を目の前にする時、「墓標」のままに捨ておいて、現代文学の不毛を嘆くだけでは、研究者の怠慢ではないかと自戒を込めて思わずにはいられない。これは

二十数年前、はじめて健作の小説に出会つて戸惑うほど瞠目させられて以来、折に触れて段々強まって来た私の感情である。<sup>(注3)</sup>

何故小説を書くことを突然止めてしまったのか。作者は「自分の作品が世間の人気に投じなかつた為」（跋）と言っているが、その独自で個性的な作品世界には、「世間の人気」とは別に、時を経て「墓標」を頼りに掘りおこし改めて味らい検討するに値する歴史的今日の問題と可能性が秘められているのだと思えてならない。健作の小説世界の独自さは、日本の近代文学が十分には対象となし得なideきた世界、近代化の中で取り残され、然も日本社会の基底を形造つて来た農村（「田舎」）を舞台に、虐げられて存在する人々に限りなく暖かな眼指を溜いだリアルな短篇群にあると確信するが、これは別の機会に譲りたい。（既に綿密な紹介もなされているので。）然し当然それも視野に、また、文学史的状况も踏まえて、私には作者が「世間の人気」にむけて、新たな小説世界の構築をめざして力を傾けたと思われる小説、これまで全く論じられることなく放置されてきた「若き教師の悩み」について、作品の形象そのものに即すことを心掛けながら私なりの読みで紹介的分析を試みてみたいと思うのである。（作者自身、「最も大切なものは作品そのものでなければならぬ。」と繰り返し述べている。<sup>(補注1)</sup>）

## 一

「若き教師の悩み」は一九一九年（大正八年）四月二十二日から六月二日まで、三十二回にわたつて「読売新聞」に連載さ

れた。作者三十六歳の作である。同年十一月、前述のように二短篇を「附録」として加えて天佑社から刊行された。二冊目の小説集である。

このことには若干の説明が必要である。単行本収録にあたって大幅に書き足されているからである。作者は「跋」で『「読売」に連載したものに、その夏、半分以上も書き足して、自分の作中の最も長いものとして（中略）出版した。』と書いているが、単行本収録「若き教師の悩み」は一から十七の章に再構成され、新聞に連載された三十二回分は、そのうちの三から九章の半ばまで七章分である。単行本の頁数による単純計算で全体は二百四十頁、四百字詰三百七十八枚、うち新聞連載分は八十二・五頁、四百字詰凡そ百三十枚分である。前に二章、後半八章分が書き加えられた。「半分以上も書き足して」には相違ないが、三倍近く書き足して完成したのである。後述するが、単行本収録に当り、改めて問題（主題）の検証と展開を試みたものとして検討・評価を要する重要な内容をもっていると考ええる。「力を傾けたと思われる小説」と言った所以である。序でに触れておけば、新聞連載の部分は、前後の整合性にかかわる極小部分の削除・加筆・訂正にとどまり、殆どと言ってよいほど変えられていない（テキストクリティクは今は省く<sup>補注2</sup>）。但し全体に亘るものとして、主人公の名前の使い方が変えられている。連載時は「飯田」昇治<sup>1</sup>で、呼び掛けられる時だけ姓で「飯田さん」他は全て「昇治」（名）が使われていたが、単行本で完成された作品には、全て「飯田」（姓）が使われ、名の「昇治」は一度も使われていない。（従って単行本の限りでは名は不明。名前にこだわ

作者には、「浮雲」の本田昇が頭にあつたかも知れない。自分の息子に「土」を除く、「農（一）、工（次）、商（三）」を付けた。主人公を突き放す配慮かと思われる。（他の登場人物名にも若干の変更がある。）

次に私の関心と作品分析の視点に関連して、「若き教師の悩み」の健作の小説歴における位置を見ておきたい。健作は一九〇九年（明治四二）処女作「鼯鼠」を発表以来十年、「若き教師の悩み」が書かれる一九一九年までに既に二十九篇の短篇を発表し、文章表現にも磨きがかかり、「世間の人気に投じなかつた」とはいえ個人的小説家として一定の評価を得ていた。森田草平の賞讃を得た「山鳴」（一九一〇）、漱石に推讃された「蛇」（一九一〇）、（また「残骸」——一九一四——は漱石の依頼で書かれた<sup>注4</sup>）、後に代表作として文学全集に収録されることになる「夜の人々」（一九一一）、「影なき人」（一九一六）、初めて単行本になり作家としての地歩を築いた「お絹」（一九一二）などが既に発表されていたのである。（以後の発表は八短篇に留まる。）後に「郷里への愛着を強く秘めた、土臭い誠実な作風」（紅野敏郎）、<sup>注5</sup>「青木健作の文学的魅力は、その時流に棹さすことなく、ただ故郷の土臭い自然とそこに生きる健康で誠実な小民たちの純粹愛を、ひたすら描き続けてきたところにある」（桑原伸一・前掲書）に代表される個性的な短篇作家としての評価は、自己認識とは別に略決定していた。然しそれは個性的なるが故に文壇の主流からは距離を余儀なくされ、自己に誠実なるが故に時代のいづれの潮流に対しても健作は焦燥的異和感を禁じ得なかつたのではないかと思われる。

健作が小説を書き出した一九〇九年、明治四十二、三年頃は自然主義の全盛期であるが、「若き教師の悩み」が書かれる一九一九年（大正八年）頃には、自然主義も漸く反省期に入り、また反自然主義の耽美派系統も急速に衰えを見せはじめ、白樺派系統の理想主義が幅をきかせ出す一方、いわゆる社会派（プロレタリア文学）の抬頭の兆も見えはじめるという目まぐるしい時代的蕩揺に遭遇し、様々な個性による自己主張の氣運が高まる中で、それまで「田舎の自然や人間でなければ自分の創作慾を刺戟しな」（跋）かったという短篇小説家青木健作は、新たな小説の舞台と対象の拡大を求めて自己の作家的資質の可能性を賭け、「若き教師の悩み」において意欲的試みを企てたのではないかと思われる。（成田赴任から「若き教師の悩み」が書かれるまでの十年間は、既述のように、作家として最も充実した期間であると同時に、生活的には大変ながらも昂揚の時期であつた。<sup>補注3</sup>）

小説の分析に入る前に、既述の事情も考慮して、梗概を示すことから始めたい。

舞台は大正の初め頃、千葉のN町の不動様経営の私立中学校（旧制）。主人公「飯田」は、山口の田舎から上京、東京の大学を卒業し、その年の十一月、この中学校に修身と英語を教える教員、しかも教頭として赴任した。小説の世界は、着任してから略一年を経過した所から略半年（赴任してからは略一年半）の教師生活の、正に若き教師の、二人の女性体験を含む青春の「悩み」が繰り広げられる物語である。

同僚の老教師が生活の為に北海道でも最も寒い旭川への赴任を余儀なくされ、十一月、寂しく旅立つところから書き出され、飯田は老教師の身の上を案じ、その辿る運命に思いを馳せ、赴任してから一年にもなるが、教育の現場には強い不満を持ちながら「毎朝早く弁当を持って出て、心にもない空しい事を蓄音機の様に饒舌って疲れて帰って来る。」だけの現在の「空虚な」自らの教師生活に、将来のあるエリートがこれではならぬと遣る瀨ない焦燥感に襲われる。

「飯田の一人住居の家はこの町での有数な富豪（黒田）の隠居部屋である。」が、空しく荒んだ氣持で帰宅した飯田のもとへ、時々行ったことのある町の小料理店の酌婦でおみね（村田楼のお峰）という年増が料理と酒持参で夜に訪ねて来る。店で酔った時に「御馳走を沢山持つてくるなら土曜日に来ても良い」と言ったことがあつたのである。「深い思慮もなく」迎え入れるが、おみねは泊り込むつもりで訪れている。女は酔うにことよせて言い寄る。男は「発作的に強烈な亢奮に慾情を刺戟される」が、倫理的な煩悶の末、その夜は追い帰り、「偉大な強迫から脱れた消極的な満足」を得る。素直に引き下った純な女に「憐愍の念」を抱く。飯田は「アンニュイな心持」で、「問題が未解決の儘取残されてゐるやうな感もするのであつた。」（ここまでが書き加えられた前二章で、次からが連載の書き出しである。）

飯田は改めて村田楼のお峰を訪ね、一夜を明かすことになる。そして「俺は穢れたのだ。」「貴き童貞の矜<sup>ほこり</sup>」を失つたと煩悶し、生徒の「純潔」な姿を前に戦き、「自分自身に対して如何ともし難い大きな罪を犯した事を最も痛切に感じ乍ら」も、日が経つ

につれて苦悶は薄いできき、反対にお峰に対する慾望は募り、「何といふ深刻な快感だ。お峰の肉体の為に生命そのものをしやぶり、尽されさうだ。それも本望だ」と、学校も休み勝になり、二人で旅行するまでに「昏惑の深み」に嵌っていく。「お峰の身体に脅迫的な牽引」を感じ、好意も持つのであるが、将来のある身で酌婦を妻にするなどとも考えられない。「何時迄もこんな女に引摺られて行く俺なのか。早く遁れたい、遁れなくてはならぬ。」S町への旅行を契機に「性慾」の対象であったお峰の肉体に「言ひ難い嫌悪の念」を感じ、両親もなく教養もない「慙むべき女」を気にしながらも手を切る決心をする。以来お峰に逢わなくなつた。

ところが村田樓の主婦が「手切金」を要求に校長の所へ談判に訪れる。飯田は事の次第を打ち開けて処分を受ける決心をするが、校長は「相手は殆ど売物買物同様の女」、気にすることは無いと寛大で、二十円(注6)の手切金を一時校長に立換えて貰つて処理をする。飯田は校長の言には反発を感じるが、「自嘲自憤の念を禁じ得なかつた。」また、生徒の中には日曜も親を扶けて働いているものがあるのに、こんな生活を続けて「穀潰だ」と恥じている。「下等な女と思ひ乍らも何所かに捨て難い懐しみを感じさせる」お峰のことが心を離れないでいる時、お峰(木下みね)が客に騙され、刃傷に及び収監される。「常に強き者の味方ばかりしてゐる国家や社会の制度や風習の罪であるから、その責任は国家や社会が当然に負ふべきである。」と憤るが、こうなつたには自分にも関係があるのではないかと責任を感じ、可哀相になり、同期の法科出の知人弁護士にお峰が釈放されるように頼む。

お峰は不起訴放免になる。お峰は「今度のことだつてみんな先生の勢ですよ。……だけど妾、先生を小指の先ほども怨みはしません、怨むなんて勿体ないことですよ」という、分を弁えた健気な女でもある。飯田は日記に、

「俺の童貞を奪ひ去つた者はお峰だ。

俺に遊蕩の味を覚えさせた者もお峰だ。

けれど俺に眠れる真の人間性を喚び覚まして呉れた者もお峰だ。

俺の卑劣な心の底を幾分でも抉り出して呉れた者もお峰だ。」  
「あゝ忘れ難き大正△年。両親よりも、兄弟よりも、朋友よりも、旧師よりも、誰よりも深きく足跡をわが生命の上に印したるお峰。」と書きつけた。

お峰の件は落着、新年を迎えて「新しい生活」に入る決意をし、「一体俺は教育家たるに適してゐるか。少くとも修身を説く人たる資格があるか。」と自問、「何より先に自分自身を教養しなければならぬ。」と勉強に励み、「希望と自信」と落ち着きを取り戻すが、常に飯田を苦しめたのは「性慾の問題」であつた。

そんな折三月半ば、飯田が三人の妹の中で一番愛した末妹(上二人は嫁いでいる)の君子が山口から上京して一緒に住むことになる。君子は従弟の達雄の許嫁で、達雄が「高文に及第して役に就く迄、君子を飯田の所へ、女中代にでも置いて貰いたい。」ということになつたのである。飯田は「求めた或物を与へられた様な心持」で、「あの優しい妹に伝侍かしづかれて暮らす事の幸福」を思い、「怖しい妄想」(近親相姦)から羞恥を感じたりもするが、一緒に住む部屋も新しく用意し、「骨肉の愛を恣にし得る」

喜びを感じる。が、それも束の間、達雄が急に君子と一緒にいといと勉強も手につかないと言い出し、飯田は彼等二人と一緒に住むために利用されただけだと「嫉妬」と反発を感じたが、「彼等は今恋愛に燃えてゐるのだ。」「厭でも俺は彼等に同意してやるべき義務があるのだ。」と諦めなければならぬのであった。(村田楼に泊った日から、ここまでが新聞連載分である。)

妹が去り、また独り者にかえると、頭に浮かぶのはお峰のことで、改めて「貴い初恋」の女であつたと思う。「それなのに何故お峰を捨てたか」「永久に遇はずに陰乍ら彼の女の祝福を祈り、よき記憶の中に彼の女の生命を生かそう」などと勝手な自己弁護をしていた不徹底な自分、また妹と達雄との同棲に賛成したのも「寛大とか愛他とかいふ徳目を強ひて身に粧うて、偉くなろうとした為だ。」いずれも自分は「虚偽」をやつてきたのだ。「自分には真から人を愛する心が缺けてゐる。」「自己の眞の感情生活を偽る事が、自己に対して最も怖い罪悪だ。」と自省する。

飯田は新しく用意した部屋を引き払つて、もとの下宿に戻るが、今度は離れでなく、主屋の一部屋に入ることになる。そこには一見淋しそうな師範出の小学校の女教師(川井あき子)が下宿していた。「今の索落たる彼の気分にはこんな淋しい女が却つて淡い快感を喚ぶのであつた。」飯田の第二の女性体験がはじまるのである。

飯田は新学期を迎えて一年生の受持になり「初々しい彼等に接する」喜びを感じるとともに、自己の「不純不潔」を恥じたが、自分にあくまで「正直」に徹して生きる決意を新たにす

のである。

四月も下旬になると、徐々に女教師は飯田に好意を寄せるようになるが、「飯田は素より女教師に対して恋心といふ程の濃い情緒を感じなかつた。」ところが、一緒に観劇に行つて「思はず女の手を握つた」ことを一つの契機に、女の恋心は急速に募る。飯田も「強迫的な慾望」に襲われ、「どうせ処女でないものなら心の儘に蹂躪してやらうか。畢竟彼の女は俺の犠牲となる為に生まれて来たかも知れない。」とまで思いつめたりしたが、「妾は先生にならどんなに酷い目に遇はされても決して恨みません。よし先生の手で絞め殺されても妾は本望です。」という熱烈な恋文をも無視し、「突発する慾情を他にしては、彼の女を恋する気分にはなれなかつた。感謝と恋愛とは全然別物であつた。」と、拒絶するのである。一方「性慾の問題」には悩まされ続ける。

この間職場では、文部省視学官の視察(同行者の中に高校時代の友人がいた。)があり、官僚的権威に対しての激しい反発。病弱の同僚に辞職勧告することを校長に頼まれて断る一幕もある。また同僚教師、「憐れむべき人」達への嫌悪と軽蔑。友人教員を使つての陰險な辞職勧告をした校長に対する純真な生徒達の反発。

これらさまざまの出来事に対して常に自己を堅持し、激しい感情に苛まれながらも常に一定の距離を置いて踏み込むことをしない自分には「生まれ乍らにして二つの性質」がある。「勇者的性質」と「迴避的隱者的性質」で、「後者の為に全人格を支配される傾向があつた。」と自己分析をする。

そんな折、突然中学時代の友人で「熱烈なソーシャリスト」の田村秀一の訪問を受ける。彼は不幸な経緯を経て官憲につけ狙われる身である。熱烈に主義を語り飯田を誘い入れようとするが、「自己」の幸福を犠牲にして同胞の愛の為に働いてゐる「友人の姿に畏敬の念を抱きながらも、「社会を改造するよりも先ず自己を改造する事に悩んでゐるのだ。」と、同調はしない。が、「生活の根柢から大激動を被った心地がして、名状し難い昂奮と苦悩を全身に感じた。」「彼の何となく強烈で自由な人格その物の力」に強く共感するのである。

そのうち女教師は飯田とのことが噂になり、房州の漁村の小学校に左遷させられてしまうことになる。その話を彼女から訴えられた飯田は、男女の交際も出来ぬというのかと憤るが、最後の女の痛切な恋の訴えも「実を言へば恥ずかしい事だが、私はあなたに対して肉体的要求を感じたことは多いが、まだ真にあなたを心の底から恋しいと思つた事はないのです。」と、すげなく拒絶してしまう。そして「危い所を遁れた。」と「軽い勝利感」さえ味わうのである。「自己中心な心」の自分を顧みて「卑しい男、弱い男、寂しい男、それが俺だ」と煩悶、再び別れたお峰のことが恋しくなる。

そして県下中学校主席教諭会のためC町へ出張の折、気のすすまぬ宴会——県視学などに敬意を払つて杯を交わす事——を辞してお茶屋に這つて泊まることになり、そこで若い女のため「忌はしき病気」(性病)に罹る。校長に打ち開けると、「人間になる為の、一つの必要な道程」「かういふ痛々しい現実に触れるのは慥に良い薬」と諭され、学校の方はうまく配慮するか

ら、ゆつくり療治しなさいと優しく言われて、端なくも涙したりする。入院した飯田は、純真な生徒達の見舞状を前に、「事多かりし一年半の総勘定をすべき時がきたのだ。」自分の新しい出発のためには、事実ありのままの自分の姿(病気の真相)を「生徒の面前で暴露する」勇氣が必要だと決意し、「幾分爽快を覚えるのであった。」

## 二

まずこの小説の基本的な性格に関わる問題、いわゆる私小説的な構造について見てみたい。作者は次のように解説している。

「作の場面は成田を中心とした一帯の地方、人物は一中学教師。でモデルは自分だろうとよく聞かれた。勿論ある点まで自分に相違ないが、あの中の色々の事件が悉く事実の複写であるが如く信じてゐる読者が少くなかつたのには一寸驚かされた。事実その儘は十の中で一つもないのだ。此の作にある評家は材料が作者の主観でよく燃焼してない、ナマの儘だと批難した。それは当たらない。ナマの材料は殆ど一つもないのだから。併し作として完璧でないことは無論である。」(『短篇集』跋)

作者も認めているように、成田での自らの教師体験を踏まえた小説であるが、このこと自身、この作者にとつて初めて唯一の試みで、問題はどのように小説化が試みられているかである。

青木健作は、一九〇八年(明治四十一年)七月(この頃は七月卒業、新学期は九月)、東京帝国大学文科哲学科(美学専攻)を卒業し、翌一九〇九年十一月十一日(「学校日記」に依る)

千葉県成田中学校（現成田高校、成田山新勝寺経営）へ修身と英語担当の教員として赴任。二十六歳。（そこには鈴木三重吉がおり、三重吉は健作と同じく一九〇八年帝大を卒業、その年の十月九日、即ち健作より一年前に教頭として赴任していた。三重吉が一九一一年——明治四十四年——四月八日辞任の後を受けて教頭となった。）成田の幸町、黒川方へ下宿。一九一一年、教頭になって成田町幸町の石井醬油屋隠居所に移る。一九一五年（大正四年）三月に退職した。五年五ヶ月の在職であった。<sup>（注八）</sup>

この成田での教師体験が土台（材料）になっていることに間違いない。「事実その儘」は殆んどないと言っているが、それは私小説作家のそれから見てのことで、例えば、学校名は小説では「私立学校」とだけあるが、「関東第一」といふべき信仰の靈地でその上に経営も宗教家」からは、作者が赴任した成田山新勝寺設置の成田中学校で、学校規模（当時成田中学校は全校生徒二百数十名<sup>（注七）</sup>）も小説では具体的に触れられていないが、その叙述から小規模と想像される。風景描写は綿密で、地名のN町、C町、S町は、他の実地名（安食など）の使用や地理的狀況の叙述から、成田、千葉、佐原を想定することは容易である。更に下宿先の「この町での有数な富豪の隠居部屋」「黒田」も健作が下宿した「黒川」、教頭になってから移り住んだ「成田町幸町の石井醬油屋隠居所」が踏まえられていよう。唯一の友人として登場する同僚の「高橋」は主人公より一年前に赴任した英語教師ということで、鈴木三重吉と重なる部分をもっているかも知れない。

また時期はいつ頃かの問題は、小説には主人公の日記として

「大正△年」と記されているだけであるが、小説の書かれた大正八年以前を前提に、主人公の赴任が教頭として十一月十日、健作の赴任が明治四十二年十一月十日、明治四十四年教頭（赴任は「学校日誌」では十一日になっており、これが書類上正式かと思われるが、作者の記憶も多分実際に着任——学校に出た——したのも十日と推定される。）など前後しながらも符合しており、主人公が赴任してから小説の結末まで略一年半であることなどを考え合わせると、実際の体験とは「事実その儘」とはせずに、二、三年後にずらせて期間を縮め（虚構して）大正の初め頃に設定したということであろう。

このように見てくると、場所、時期とも作者の体験的事実が略小説の枠組みを決定しているので、文壇の趨勢もあって読者の誤解を生む要因になった。事実関係にこだわり過ぎた嫌いがあるが、これは作者の小説観に関わることで、「事実その儘」を避けて意識的に仮作<sup>（注九）</sup>った（虚構）と認識している潔癖な作者を「驚か」した——不満であったと考えられる。

文学史的な視野で見ると作者の小説についての考え方には、西洋近代小説から学ぶところ多く、坪内逍遙の「小説神髓」以来の小説観、即ち「小説の主人公は実録の主とおなじからで、全く作者の意匠になる虚空仮設の人物なるのみ。されども一旦出現して小説中の人となりなば、作者といへども擅<sup>（注十）</sup>に之を進退なすべからず。恰も他人のやうに思ひて、自然の趣をのみ写すべきなり。」の影響下にあることを読み取ることが出来ると思われるが、「他人が何と言はうが、芸術は到底自己以外のものであつてはならない。」「芸術的作物は飽く迄作者の純粹感情に俟た

なければならぬ。」(『短篇集』跋)という強い信念を持っていた作者は、所謂「傍観模写説」に墮することを避けて、二葉亭四迷の「小説総論」の「実相を仮りて虚相を写し出す」というリズム小説論のもつ積極性、すなわち「意(アイデア)」を重視し、自分のもっている観念や思想を積極的に形象しようとする強い意志が働いていた。また、自然主義が既にその積極性を失ない「無理想」「無解決」という、社会という対象をすら見失なう危険性を孕んで来たことへの不満も感じていたと思われる。かと言って自分の体験を「事実その儘」ぶちまける私小説は良しとしなかつたのであろう。

従って作者は、自らの体験や事実はあくまで材料として、小説世界の枠組み造りやその展開に使っていることは間違いない所であるが、事実がどれだけ使われているかという詮索は、この小説の本質にとって、それ程重要なことではない。問題はこの作品が持つ内的構造である。作者がどのような構造のもとで、主人公がどんな人物として形象され、作者の「自己」がいかに独自の作品世界を成り立たせているかである。

日本が近代化の道を歩む中で、時代の潮流を敏感に反映する教育という場を設定し、地方から上京して大学を出、エリートとしての出世が期待される、正義感にあふれる青年教師を主人公に、近代化・帝国主義化がすすむ明治から大正にかけての教育界で、次の世代を担う主権者を育てる教師として、社会主義的潮流への関心なども配しながら、個として現実的対応が問われる青年期の女性体験を通して、如何に生きるかの課題を真当に据えた小説であると言えると思う。

この時作者の「自己」が、当然主人公との重なりを強め、作者の感情や思いを存分に注入した作品として、功罪を含めてこの小説の性格を最も特徴づけることになっていてと考える。作品世界の具体的な形象を追ってその具体を見てみたい(次章以下)と思うが、この内的に私小説的構造をもつという特徴は、主人公以外の人物も作者の目でというより主人公を通した作者の目で描かれ、あくまで主人公の心理や感情が主で、他者や客観的生活的ディテールは従になり、ややもすると主人公の「悩み」や行動は作者の「自己」から強く制御を受けることになる。作者の「自己」を通しての鋭い批評を生みながらも、結果として「悩み」を内面的主観的なものに止どめかねない。主人公を突き放し、臍の緒が切れるかどうかが問題である。これはこの小説を見ていく一つの重要な視点で、まさに具体的な形象が問われる所以である。作者の具体的な実体験を材料に、作者の分身としての主人公が設定されたことは、近代小説の誕生が自己の内部体験を吐露すべきものであるとすれば、それは間違いなく積極的条件であるが、主人公と「自己」をともに対象化することの困難性も同時に孕むもので、これは作者の意欲的な試みが新たな文学的現実の創造にむけて抱えた重い試練であったと言えよう。(以下次号)

注1、復刻版には、長男で俳諧研究家の井本農一の「復刻版のあとに」という解説と、青木秋雄・青木恵美子作成の年譜が収録されている。この解説には「原著にあった『虻』と『夜の人々』は、筑摩書房の『明治文学全集』第七十五巻『明治反自然派文学集(二)』に収められ、誰でも容易に読み得る状態なので、今回は割愛した。」とあるが、これに

は別に事情があつての妥協策であつたとのことである。(青木惠美子氏談)

注2、「長塚節氏の小説『土』」(明治四三・六・九、「東京朝日」、岩波書店『漱石全集・第十六巻』一九九五年四月、所収)

注3、かつて青木健作について小文を書いたことがある。「初代校長・井本健作(一)」(『研究と評論』一九八九年十一月刊)

注4、依頼した原稿を受領したという青木健作宛の一九一四年九月一日付書簡がある。(岩波書店『漱石全集・第二十四巻』一九九七年二月、所収)

注5、講談社刊『日本近代文学大事典・第一巻』(一九七七年十一月)。

注6、当時成田中学校の教頭の年俸は校長と同じ八百円。鈴木三重吉の友人加計正文宛書簡参照。(岩波書店『鈴木三重吉全集・第六巻』一九三八年十二月、所収)

注7、成田高等学校『創立九十周年記念校史』(一九八九年三月一日発行)

注8、健作の成田生活を知る資料として前掲『校史』の他に、「成田での思い出——三重吉追悼——」(一九三六年八月)、『随筆・椎の実』(子文書房、一九四三年九月、所収)、「懐旧雑筆」(成田行)(一九四二年二月二日記)、「ひとりあるき」(私家版、一九五九年十一月十日発行、所収)などがある。

補注1、「新講俳諧史」(一九三五年、育英書院)「はしがき」、『日本文芸美論』(一九六一年、法政大学通信教育部)「はしがき」など。

補注2、使用テキストは法政大学図書館蔵に依つたが、国立国会図書館の所蔵本共に全く同じ二箇所印刷インクによる抹消箇所がある。二箇所とも単行本発行時の加筆部分で、五十三頁五行目六行目の二行全部と二百三十四頁の五行目十五字。孰れも性に関する部分で、検閲で抹消を命じられたものか、印刷が出来上つてから著者が出版社に依頼して抹消させたものか、現在未調査のため不明である。序でながら連載紙「読売新聞」は国会図書館蔵に依つた。

補注3、東京を離れ成田中学校への初勤務(一九〇九)、教頭への昇格による重責(一九一一)、田村寿雄次女静子との結婚(一九一二)、長男農一の誕生(一九一三)、夫妻・長男の三人で井本八之丞へ養子として入籍(一九一四)、長女花野の誕生(一九一四)、成田中学校を辞して

上京、日本大学中学校へ勤務(一九一五)、次男工次の誕生(一九一六)、長女の死亡(一九一八)、「若き教師の悩み」の執筆・発表(一九一九)。

(おおこしかしち・一九六四年修士卒)